

「七つの雷」=七つの諸事件・出来事

▶パイオニア時代における成就：

➤順序通りに起った七つの諸事件・出来事＝イエスさまが最後の贖いを始めるために至聖所に入られるまでの七つの出来事

➤人々の信仰を試す必要があったため、これらの順序通りに起こる諸事件・出来事は前もって知らされなかった。

▶終末時代における成就：

➤順序通りに起こる七つの諸事件・出来事＝イエスさまが最後の贖いを終えて至聖所から出られるまでの七つの出来事

➤人々が前もって知る必要があるため、これらの順序通りに起こる諸事件・出来事は、イエスさまが至聖所から出られて恩恵期間が終わる前に開示される。

つまり、恩恵期間が閉じる直前に順序通りに起こる七つの諸事件・出来事が、ダニエル書に記されているのです。

→恩恵期間が閉じるというダニエル書の聖句は 12 : 1 (=その時、大天使長ミカエルが立つ。彼はお前の民の子らを守護する。その時まで、苦難が続く／国が始まって以来、かつてなかったほどの苦難が。しかし、その時には救われるであろう／お前の民、あの書に記された人々は) ですから、終末時代において恩恵期間の閉じる直前に開封される「小さな巻物」というのは、12:1 までに描かれているダニエル書 11:40～45 ということになります。それが「七つの雷が語った」順序通りに起こる七つの諸事件・出来事なのです。

出典・参照：聖書研究ミシガン真夜中の叫び第 4 部：『見張り人』 P. 11

▶パイオニア時代における成就 7つの雷・7つの出来事

出典：聖書研究ミシガン真夜中の叫び第 3 部：『黙 10 章と7つの雷』

封印された「七つの雷」が語ったこと P.18～

出来事 1

1833 年：ウィリアム・ミラーが説教をする許可証を受け、第一天使の「神のさばきの時がきた」というメッセージが正式に宣言され始めた。ミラーはその二年前（1831 年）から公に再臨について語り始めていたが、彼が属していたバプテスト教会の多数の牧師たちから正式に承認をされたことは、意味深い出来事であった。同じ年の 11 月 13 日には、イエスさまご自身が語られた「再臨が近づいた」という最後のしるしである「星が空から落ちる（マタイ 24:29）」という預言も成就した。（大争闘下 21～22 頁）

出来事 2

1840 年 8 月 11 日：オスマン（オットマン）帝国の崩壊により、第六番目のラッパ・黙示録 9:15（四人の天使は、人間の三分の一を殺すために解き放された。この天使たちは、その年、その月、その日、その時間のために用意されていたのである。）の預言が成就する。それによって第一天使のメッセージに大いなる力が添えられ、再臨運動が一段と促進された。（大争闘下 23～24 頁）

出来事 3

1842 年 6 月：アメリカにおける殆どのプロテスタント各派の教会は、ウィリアム・ミラーが宣言した第一天使のメッセージを拒否、そして教会は墮落していった。その結果、第二天使の「バビロンは倒れた」という預言が部分的に成就した。（1T21 頁、大争闘下 81～93 頁）

出来事 4

1844 年春：最初の失望、「十人のおとめ」にある「花婿の来るのが遅れる」という預言が成就。それと同時に、ハバクク 2:1～4、エゼキエル 12:21～28 にある、「幻の成達は遅れるが、信仰を持ち続け待て」という内容の預言も成就。（大争闘下 95～99 頁）

出来事 5

1844 年春から夏：十人のおとめたちは居眠りをし、眠ってしまうという預言が成就。（大争闘下 100 頁）

出来事 6

1844年夏から秋：「真夜中の叫び」の宣言で、十人のおとめたちは「みな起きた」という預言が成就。もうすでに墮落したバビロンの諸教会から離れるように…という第二天使の使命が宣べ伝えられた。(大争闘下 105~110、142~143 頁)

出来事 7

1844年秋：2300日の預言が成就し、イエス・キリストが天における至聖所に入れられ、最後の贖いが始まった。それと同時に、大失望・「苦い経験」という預言も成就し、婚姻の部屋に入った思慮深いおとめと、入れなかった思慮の浅いおとめという二つのグループが結成された。(大争闘下 110~114、143~145 頁)

・・・まもなくやってくる恩恵期間が閉じる時まで順序よく起こる7つの出来事(第4部で取り扱います)を、神さまは私たちに前もって知らせてくださっているのです。でもそれらの7つの出来事は今まで封じられていました。・・・「このような7つの出来事が起こり始めたら、もうすぐ恩恵期間の戸が閉ざされますよ」という警告のメッセージなのです。

・・・パイオニア時代に起きた7つの出来事が、最後の贖いが始まる時(1844年秋)が近づいた・・・ことを示していたように、終末時代に起る7つの出来事によって、最後の贖いが終わる時(恩恵期間の戸が閉ざされる時)が近づいた・・・という神さまからのメッセージなのです。

出典：真夜中の叫び第3部：『黙10章と7つの雷』封印された「七つの雷」が語ったこと P.18~

【参考】七つの雷

タイトル(書名)	章:節 聖句 [検索対象総数: 2 / 聖句等の総数 33250 <七つの雷>3個]	聖書Navi Active 393128091 (新共同訳) [検索語彙: 七つの雷]
S ヨハネの黙示録	10:3 獅子がほえるような大声で叫んだ。天使が叫んだとき、七つの雷がそれぞれの声で語った。	
S ヨハネの黙示録	10:4 七つの雷が語ったとき、わたしは書き留めようとした。すると、天から声があって、「七つの雷が語ったことは秘めておけ。それを書き留めてはいけない」と言うのが聞こえた。	

【参考】神の救いの計画

神の救いの計画 (教皇至上権の終焉から新しい天と新しい地までのフローチャート)



(黙示録 20:11~15)

▶終末時代における成就

ダニエル書 11 : 40~45

40a **終わりの時** (קץ:kates;[最も]境界、終わり=1798年) **に至って、南の王** (→南の王はエジプト) **は彼に戦いを挑む。** |40b それに対して**北の王** (→この時代の北の王はバビロン) は、戦車、騎兵、大船隊をもって、嵐のように押し寄せ、各国に攻め入り、洪水のように通過して行く。41 あ『麗しの地』(→ユダ) もこうして侵略され、多くの者が倒れる。アンモンの選ばれた者、エドム、モアブはその手を免れる。42 彼は国から国へと手を伸ばし、**エジプト**もその手を免れえない。43 エジプトの隠された宝、金銀、宝物はすべて彼の支配するところとなり、リビアとクシュは彼の進むところに従う。44 次いで、東と北からの知らせに危険を感じ、多くの者を滅ぼし絶やそうと、大いに激昂して進軍する。45 海とあの『麗しの地』の聖なる山との間に天幕を張って、王の宿営とする。しかし、ついに彼の**終わりの時**が来るが、助ける者はない。

㊦11 : 40a (前半部分) は 1798 年に起った法王 (→教皇 : 現在は「教皇」として表記が統一されている) 制ローマの失墜という過去の出来事で、恩恵期間が閉じる直前に起る事ではない。

→ヨハネの黙示録 13 : 3 この獣 (→教皇制ローマ) の頭の一つが傷つけられて、死んだと思われたが、この致命的な傷も治ってしまった。そこで、全地は驚いてこの獣に服従した。



リビアは、古くはエジプトから西のアフリカの総称だったが、後にエジプトとアフリカのローマの属州との間の地域の呼び名になった。クシュはエジプト南部で、現在のエチオピアとスーダンにまたがる地域 (図は参考である)。

出来事 1

40 節後半 : ベルリンの壁・ソビエト帝国の崩壊において、終わりの時代の法王制ローマがアメリカと手を組み、共産主義・無神論主義に対して勝利する。過去におけるオスマン (オットマン) 帝国の崩壊により第一天使の使命が促進されたように、この出来事が、終末時代の再臨運動を一段と促進させるためであった。(黙示録 9 章、11 章、13 章)

▶ベルリンの壁崩壊は、1989 年 11 月 9 日に、それまで東ドイツ市民の大量出国の事態にさらされていた東ドイツ政府が、その対応策として旅行及び国外移住の大幅な規制緩和の政令を「事実上の旅行自由化」と受け取れる表現で発表したことで、その日の夜にベルリンの壁にベルリン市民が殺到し混乱の中で国境検問所が開放され、翌 11 月 10 日にベルリンの壁の撤去作業が始まった出来事である。略称として壁崩壊 (ドイツ語: Mauerfall) ともいう。

▶ソビエト帝国の崩壊 : 1991 年 12 月

▶オスマン (オットマン) 帝国の崩壊 : 1922 年

出来事 2

41 節 : アメリカにおける日曜休業令法案の成立において、終わりの時代の法王制ローマがプロテスタント教・世俗主義(かつてのフランス革命時代に見られた退廃した社会)に対して勝利する。厳しい圧力に負けてしまう人々も多くいるが、神の民による「大なる叫び」を聞き、真理の下に集められる大勢の人々がバビロンから脱出する。(黙示録 13 章、14 章、18 章)

日曜日を守る (Sunday keeping) 法律を作り施行するので**日曜休業令 (Sunday Law)**といわれている。今までも、ドイツなどで部分的に日曜休業令が出ているが、一部の地域だけに限られる特殊な条例だった。終末時代には、まずアメリカで始まり、やがて全世界的に日曜休業令が施行されると預言されている。

ローマ教会（ローマ法王）とアメリカのプロテスタント教会は一致して、日曜休業令を發布、施行します。教会が国家権力と結合して、法令を出す。安息日を守る者には罰則を与える。こうして、信教の自由が奪われるのです。日曜日遵守を受け入れることは、ローマ教会が定めた日曜安息日に同意することになります。聖書の安息日を知りながら、なおも日曜日を遵守するなら、獣の刻印を受けることになるのです。日曜休業令が獣とその像の強制となり、日曜日遵守が獣の刻印となるのです。

出来事 3

42 節：世界における日曜休業令の法案成立において、終わりの時代の法王制ローマが世界中の様々な異教に対して勝利する。世界の宗教と政治力が、終わりの時代の法王制ローマの下で統一され、迫害が世界中に広まっていく中、各国からも人々が真理の下に集められていく。（黙示録 13 章、17 章、18 章）

出来事 4

43 節：更に、世界の経済力と軍事力が統一され、終わりの時代の法王制ローマが世界克服を成し遂げて完全な勝利に近づく。その結果、激しい迫害も一段と増し、売ることや買うことができなくなり、捕らわれてしまう神の民もいる。（黙示録 13 章、17 章）

出来事 5

44 節：それでも、真理の下に集められた神の民は、全世界からの怒りと憎しみに耐えながら永遠の福音を力強く発信し、戦いを続ける。それに対して迫害がピークに達し殉教者も続出、怒り狂った終わりの時代の法王制ローマが勝利するかのように見える。（黙示録 13 章、14 章、17 章）

出来事 6

45 節：しかし、美しいキリストの義に包まれた神の民が「勝利の教会」として誕生、彼らは内なる愛の品性の証を全世界に宣べ伝えてこの最後の戦いについて勝利する。それを妨げようと、終わりの時代の法王制ローマが立ち上がるが、その時、終わりの時代の法王制ローマは崩壊の道をたどり始める。（黙示録 14～19 章）

出来事 7

12 章 1 節：その時（→勝利の教会が誕生し、終わりの時代の法王制ローマが崩壊し始める時）、イエスさまの至聖所における婚姻・贖いが終わり、恩恵期間が閉じる。命の書に名を記された人々は皆救われる。（黙示録 15～18 章）

黙示録 10 章で、イエスさまが「ししのように大声で叫ばれて」開示されたこの「小さな巻物」を、私たちが深く理解する時は、“今”です。・・現在私たちは、出来事 1 と出来事 2 の狭間に生きているからです。次に起こる出来事は、アメリカにおける日曜休業令であり、それは「大いなる叫び」のスタートを意味します。更にそれは「後の雨」が降り始める時でもあります。「小さな巻物」であるダニエル書 11：40～45 が、「小さな悩みの時」という短い期間に起こる出来事を順序よく描いていることは、下記の引用文をよく読むと解かります。また、「後の雨」の正確なタイミングも、ここにはっきり書かれています。これは終末時代に関する預言を理解するうえでの重要な光であるため、アメリカでは多くの SDA 信徒たちがこの引用文をよく知っています。終末時代に起る出来事のタイミング・時期を知るうえでの鍵となりますので、しっかりと噛みしめながらこの有名な引用文を読んでみましょう。

Q「悩みの時の開始」とは、いつ？

→「我々が出て行ってもっと徹底的に安息日を宣べ伝える」時ですから、出来事 2 のアメリカにおける日曜休業令が発せられた時です。

Q その時（＝出来事 2 が起こった時）、何が与えられるのでしょうか？

→「後の雨」が与えられ、われわれは聖霊に満たされます。

Q その時与えられる「後の雨」の目的は、何でしょうか？

→①第三天使の大きな声（大いなる叫び）に力をそえるため、②最後の七つの災害（＝七つの災い）がくだる時（＝大いなる悩みの時）に、聖徒たちが立つことができるように準備を与えるため、③御霊の実が熟し品性を完成させるため。（Testimoniesto Ministers P.506）

初代文集 P.172～173

「悩みの時の開始にあたって、われわれが出て行ってもっと徹底的に安息日を宣べ伝えたとき、われわれは聖霊に満たされた。…『悩みの時の開始』とここに言われているのは、災害が降り始める時のことではなくて、キリストがまだ聖所におられて、災害がくだり始める直前の短い期間をさしている。救いの働きが終了しつつあるその時、地上には悩みが起り、諸国民は怒り狂うが、第三天使の働きを妨げないように、まだ抑制されている。その時に、『後の雨』、すなわち、主のみ前から慰めの時がきて、第三天使の大きな声に力をそえる。そして、最後の七つの災害（＝七つの災い：神の贖いの愛に対して心をかたくなにし、悔い改めない人たちに注がれる。神の怒りは、正しい裁きであり、滅びる者は、自らの選択の結果を刈り取ることになる→キリスト者＝詩編 91：6、7、10）がくだるときに、聖徒たちが立つことができるように準備を与える。」

その霊的な戦いのクライマックスが、この「小さな巻物」に描かれているわけですが、テロ戦争だという上記にご紹介したような解釈では、国々や勢力の間で繰り広げられる軍事的な戦いが焦点となってしまいます。

ダニエル 11:40～45 がまだ開示されていなかったパイオニア時代にいたユライア・スミスの解釈も、トルコ・ロシア・フランスなどの軍事的な戦争がこの箇所を中心となっています。ちなみに、他のプロテスタント教派でも、エジプトやリビアで起った「アラブの春」がこのダニエル 11:42～43 に預言されている…と解釈する人々が出てきて、話題になりました。これらの解釈の共通点は、霊的な戦いではなく、軍事的な戦いに焦点を置いていることです。勿論恐ろしい武器を使った戦争は最後までずっと続きます（7BC967 頁・スタディーバイブル新約 574 頁を参照）。

しかし、世界の諸国が繰り広げる軍事的な戦いは、悪と悪との戦いであって、預言の焦点ではありません。

大争闘の終結における善と悪の戦いは、あくまでも「日曜日をとるか、安息日をとるか」「北の王・獣を拝するか、真の王・キリストを拝するか」という霊的な戦いです。

それが聖書の主要な流れということを、しっかりと頭に入れておくことが大切です。